目指すべきエゾシカ対策への取組　～地域に根ざした体制づくり～

北海道森林管理局上川南部森林管理署
占冠森林事務所森林官　妻藤　荘史
占冠村役場林業振興室
地域おこし協力隊　浦田　剛

1　課題を取り上げた背景

上川南部森林管理署（以下「上川南部署」）は北海道の中央に115,000haの森林を所管しています。うち42%は勇払郡占冠村（しむかっぷむら）に含まれ、村の面積の85%を占めています。

北海道では近年エゾシカの個体数増加と農林業被害が問題となってきました。占冠村を含む北海道西部地域の推定生息数は平成23年に26～52万頭と、平成12年以降約3倍の増加をみせ、これに伴い農林業被害も増加しました。占冠村内でも牧草の被害が、多い年で1,420万円に上っています。

こうした中、占冠村は平成22年度に北海道のエゾシカネットワーク事業のモデル地域に選定され、「占冠村エゾシカ対策協議会」を設立、酪農学園大学との地域総合交流協定の締結を経て、平成23年度に「占冠村エゾシカ対策基本構想」を策定しています。

2　取組の経過

北海道森林管理局や上川南部署は、狩猟パトロールや全道一括入林承認、林道除雪による狩猟環境の安全確保や利便性の向上、捕獲機会の確保に取り組んできました。一方、占冠村は基本構想のもと、エゾシカを資源として利活用しつつ被害防止を図る方針により、地域のハンターに委託して銃による捕獲を進めてきました。この結果、捕獲数は増加し、農業被害は減少の兆しを見せています。しかし、銃で撃たれて逃げることで警戒心を強めたシカ（スレジカ）が増え、捕獲が困難になりつつあります。

これに対し、上川南部署と占冠村は、科学的な生息情報をもとに効果的な対策を講じるべく、民国連携の取組を始めました。

餌場に集まったシカ

3　連携事例

①　シャープシューティング

占冠村では捕獲手法検討のため3カ年に渡りシャープシューティングを試行した結果、高い安全性や命中率の反面、餌付けの不確かさや射撃時期の判断の難しさが明らかになりました。実施にあたり、上川南部署は調査フィールドを提供し、占冠村は関係機関の調整や現場の作業を担いました。

②　モバイルカリング

「モバイルカリング」は車両で移動しながら、組織的かつ計画的に行う個体数調整の手法です。北海道東部の少雪、高シカ密度の道有林が発祥ですが、より条件の厳しい多雪、低シカ密度地域への普及に向け、平成25年度林野庁補助事業として、国有林では初めて上川南部署管内で実証試験に臨み、連携実績のある占冠村内で実施しました。

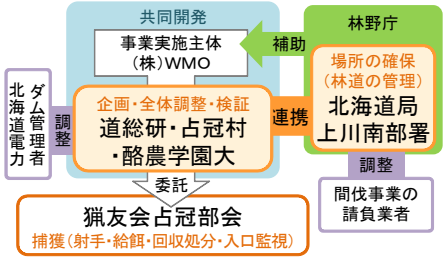

図1. モバイルカリング実行体制

上川南部署は実施路線の確保や間伐事業との調整、林道管理を担い、占冠村は(株)WMOや道総研・酪農学園大学と連携協定を結び、事業主体として捕獲作業の計画・実施・検証を行いました。試験の結果、多雪、低シカ密度地域特有の餌付けの難しさや、食肉利用に即した搬送体制構築などの課題が明らかとなりました。引き続き手法の改良に取り組んでいます。

③　占冠村猟区

占冠村は平成26年度より猟区を設定し、村が狩猟や駆除の一元的な管理を担うこととなりました。有識者や関係団体などで構成する猟区管理運営委員会に上川南部署が委員として加わることにより、地域主体の効果的な保護管理施策を目指しています。

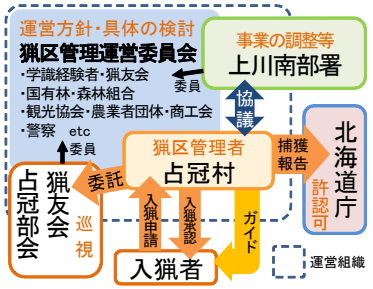

図2. 猟区実行体制

4　見えてきた体制の未来像

これまで私たちは、エゾシカ対策の取組として森林管理署と占冠村、また研究機関や道庁との連携により、先進的な取組を進めてきました。モバイルカリングまでの取組の中で、広大な森林の管理者である上川南部署が実行中の森林施業と捕獲作業の調整を積極的に行うことが、関係者間の調整を円滑にし捕獲にかかる事故を防止する上できわめて有益であることが示されました。また、最前線の行政機関である占冠村が主体的に調整力を発揮することで、ハンターや農家との連携に加え、土地管理者や研究機関、警察など、今後の野生動物管理に必要な勢力の結集が実現しました。今後、猟区などの新しい取組の中でさらに連携を強め、エゾシカ対策としての実効性を高めていけると考えています。